

新発田城



新発田城三階櫓

新発田藩

初代藩主溝口秀勝は、尾張国（現愛知県）中島郡溝口村の出身で、慶長3年（1598）に豊臣秀吉の命により6万石を与えられ、加賀国（現石川県）大聖寺から新発田に入封しました。溝口家は、越後で起きた上杉遺民一揆を平定し、慶長5年の関ヶ原の戦いでは徳川方に付いた外様大名です。

入封当時の藩領は、沼などの多い未開墾地



溝口秀勝肖像（宝光寺蔵）

でしたが、歴代藩主が河川改修や干拓などの治水と新田開発に努めた結果、美田の広がる蒲原平野へと生まれ変わりました。

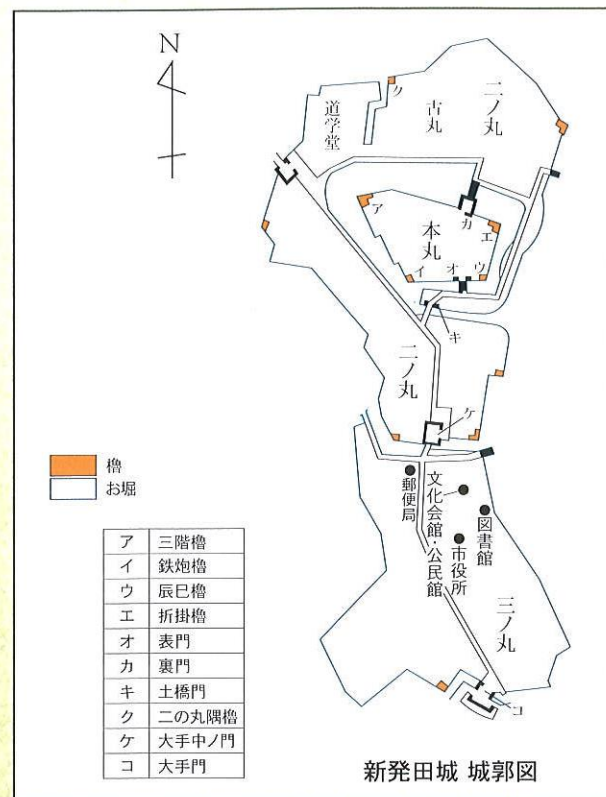
また、8代藩主の直養は学問を好み、安永元年（1772）に越後で最初の藩校「講堂」（後に「道学堂」と改称）を設立し、同5年には全国で3番目の医学館を設立しています。

新発田城の築城

新発田に入封した秀勝は、まず五十公野に仮の住居を構えましたが、上杉景勝と戦って滅びた新発田氏の館跡（江戸時代は古丸と呼ばれていた）に築城を開始しました。縄張り（建物の配置計画）は家臣の軍学者長井清佐衛門と葛西外記が行い、入封から56年後の承應3年（1654）3代宣直のときに完成しています。

城の構えは本丸を二ノ丸が取り囲み、三ノ丸が南方につき出した変形の輪郭・梯郭式併用型の平城です。これは、南以外の三方面が「馬足不叶」といわれた湿地であったこと、また、親藩である会津領方面の守りを重要視したことが理由と考えられます。

新発田城は、本丸が舟のような形をしているため「舟形城」、周囲の湿地にアヤメが咲いていたことから「菖蒲城」と呼ばれていました。また、縄張りを命じられた長井清左衛門が設計に苦勞しているとき一匹のキツネが現れ、雪の上に尾を引きながら図を示してヒントを与えたという言い伝えから「狐尾曳ノ城」とも呼ばれています。



廃藩後の新発田城

新発田藩は、明治2年（1869）に版籍を奉還し、同4年の廃藩置県により、12代、274年にわたる歴史を閉じました。江戸時代、外様大名でありながら移封がなかったことは注目すべきことです。

城内には、明治5年まで櫓が11棟と、主な門が5棟ありましたが、新政府の命令で取り壊され、堀も埋め立てられました。現在は表門と旧二の丸隅櫓、本丸石垣と堀の約半分、旧土橋門付近の土居が残っています。

本丸と二ノ丸の約半分は、廃藩置県後、陸軍省の管轄となり、第二次大戦まで歩兵第16連隊の兵営として使われ、昭和28年（1953）からは陸上自衛隊が駐屯し、現在に至ります。

表門・旧二の丸隅櫓

表門と旧二の丸隅櫓は、新潟県内で唯一、江戸時代から現存する城郭建造物です。昭和32年（1957）には国の重要文化財に指定され、昭和34年・35年に解体修理が行われています。

表門は、2階建ての櫓門で、2階の正面に敵を攻撃するための「石落とし」というしかけがあります。創建時期は明らかではありませんが、寛文8年（1668）に起きた大火（寛文の大火）の後の、享保17年（1732）に再建されたと伝えられています。

旧二の丸隅櫓は、寛文の大火から44年後の正徳2年（1712）の絵図に描かれており、このころまでには再建されていたと思われます。二ノ丸の北部にありましたが、昭和の解体修理で本丸の鉄炮櫓があった場所に移築されたため、旧二の丸隅櫓という名称になりました。

表門・旧二の丸隅櫓の腰壁は瓦張りで、白と黒が美しい海鼠壁で仕上げられています。



表門と旧二の丸隅櫓

美観を重視した石垣

寛文9年（1669）5月に大地震が起き、石垣の大半が崩れました。翌年から積み直しが行われ、石垣はそれまでの乱積みから全面が「切込はぎ布積み」（角の部分は「算木積み」）に変わりました。切込はぎとは、石を整形し隙間なく積む当時の最高技術です。積み直しには、江戸から石工職人を呼んだと伝えられており、石は市内の五十公野で産出された「古寺石」と呼ばれる硬い粗粒玄武岩が使用されています。

全長約350mに及ぶ石垣は、石積みの施工技術が全国でもトップクラスと評価され、石垣を含む本丸の敷地の一部が平成14年に市の文化財（史跡）に指定されました。

甦った新発田城 三階櫓と辰巳櫓

平成10年、秀勝侯入封400年記念事業を契機として三階櫓復元の気運が高まり、平成11年から三階櫓と辰巳櫓の復元事業が行われ、平成16年7月に完成しました。古文書・古絵図・古写真などの豊富な史料や発掘調査によって忠実に復元された櫓には、現代の名匠の技が随所にみられます。

三階櫓は、事実上の天守に相当する櫓ですが、幕府や親藩に遠慮して天守という名称は用いず、「三階櫓」や「御三階櫓」と呼びました。最上層の屋根の棟が丁字型で、それぞれの隅に1匹ずつ、合計3匹の鯨が載る全国唯一の櫓です。外部は白漆喰塗りで、各層の腰壁は海鼠壁で仕上げられています。

辰巳櫓は、外部を各階ともに白漆喰塗りで仕上げられています。

堀部安兵衛の運命を決めた「辰巳櫓」

赤穂義士堀部安兵衛は、寛文10年（1670）に新発田の旧外ヶ輪に生まれました。新発田藩の家臣の来歴を記した『世臣譜』によると、辰巳櫓の管理責任者であった安兵衛の父中山弥次衛門は、櫓の失火の責任を負って浪人となりました。息子の安兵衛は18歳の時、家名再興のため江戸に出て、高田馬場の敵打ちによって名を挙げました。



辰巳櫓と堀部安兵衛像

公開期間 4月1日～11月30日

公開時間 午前9時～午後5時

(11月は午後4時30分まで)

入場料 無料

新発田市教育委員会 文化行政課

0254-22-9534